

## 7人の生徒

2024.3.18

学級担任をしていますが、学級通信を出していなかったことがある。イタリアのローマ日本人学校時代である。なぜ出さなかったのか。出してはいけなかったからである。どのクラスも出してはいけなかった。代わりに、学校だよりが出ていた。

ローマ日本人学校には、小学部と中学部があった。1年目は中学部2年生、2年目は中学部3年生の担任となった。生徒は7人だった。中学部の上の学年は生徒1名、下の学年も生徒1名だった。ローマ日本人学校の中学部では、学年生徒1名あるいは0名というのが当たり前だった。なぜなら、小学部まではローマにいるが、中学生になると、母親と子どもは日本に戻ってしまうからである。ローマから日本の高校を受験することへの不安、ローマには学習塾がないことなどが、その理由であろう。

ところが、私が担任をすることになった中学部2年生は、開校以来初めて生徒が日本に戻らず、ローマで中学生生活を送ることにした生徒、ご家庭だった。そのような集団の前に、日本の田舎、福島県から教員がやってきて担任となった。どれほど不安が大きかったことか。ローマに残ったことを後悔したのではなかろうか。

かなりのマイナススタートとなった。今まで学級経営の柱としてきた学級通信が出せない。そこで考えた。生徒は、狭い日本人社会の中で生きている。加えて、男子4名、女子3名、計7名という小さな集団で生活している。けんかもできない。言いたいことも言えずにいるだろう。かと言って、ゆっくり話を聞く時間はない。決まった時間にスクールバスで帰っていく。それでも、生徒の思いを受け止めたい。

生徒との交換ノートを始めることにした。一人1冊ノートを用意し、書きたいときに書き、担任である私に提出する。すると、私もノートに書き、生徒に返す。最初は、それほどの分量ではなかった。ところが、だんだんと文章が長くなっていった。特に、女子3名は、ノート1ページにびっしりというのが当たり前になった。生徒が10行書けば、10行以上書いて返す。1ページ書けば、1ページ以上書いて返す。これが、私の基本スタンスである。したがって、一日に7人分のノートに書く量は、かなりのものとなった。

2年間でものすごい量となった。卒業するとき、生徒の了解を得て、ノートをコピーさせてもらった。今でも、書斎の本棚にある。そこには、異国の地で、多感な思春期を迎えていた日本の中学生が、思い、悩み、考えたことが綴られている。また、生徒の思いを受け止め、誠実に一人一人の生徒に相對していた教師の姿が残されている。日々の生活、そしてノートのやり取りを通して、7人の生徒とは絆のようなものが生まれたと思っている。それは、日本を離れた特殊な環境だからこそ成しえたことなのかもしれない。

だが、ローマでも、日本でも、書くことを通して、生徒と教師が通じ合うことはできると思う。そして、そのことは、生徒の成長に少なからず影響を及ぼすものに違いない。生徒と何度もやり取りをしたノートは、永遠の都、ローマから持ち帰った宝物である。